

九州の歴史と文化を楽しむ会

2015年3月1日

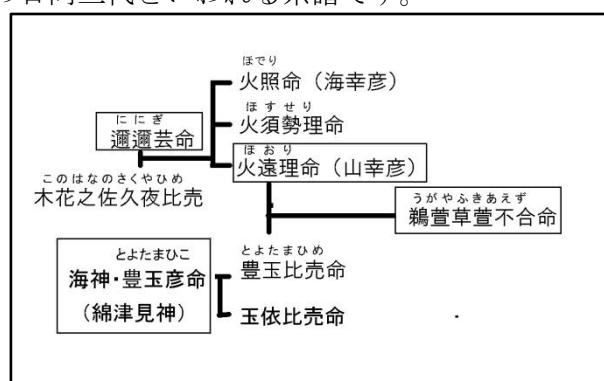
豊玉彦が拓いた古代の航路

白崎 勝

1、豊玉彦命を紹介

図は、邇邇藝命・山幸彦・鵜茅草葺不合命の日向三代といわれる系譜です。

天孫降臨した邇邇藝命の子供・山幸彦は、海幸彦との争いが生じたとき、塩土老翁に案内されて海神の宮に行きます。そこで、豊玉比売に出会い結婚します。豊玉彦は豊玉姫の父親として登場し、父と娘が同じ名の豊玉です。豊玉彦は邇邇藝命と同じ世代であることが分かります。なお、神武の母・玉依姫は豊玉姫の妹です。



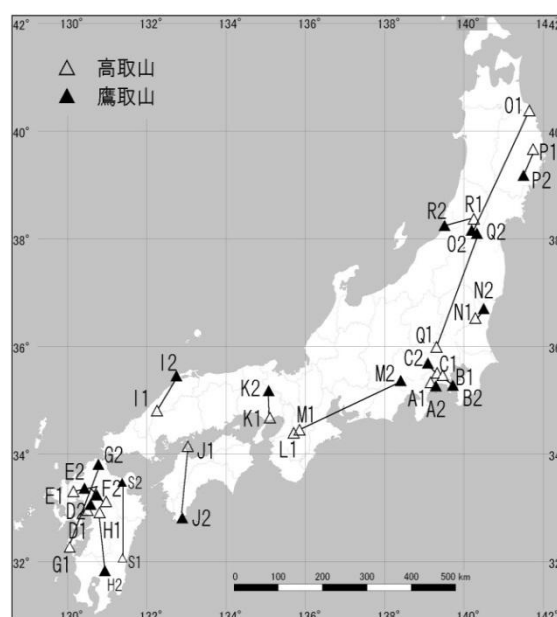
海神の宮は龍宮と呼ばれ、そこに豊玉彦は住んでいました。開聞岳の麓、長崎鼻に龍宮神社があります。海神と書いて「わたつみ」と呼びます。綿津見神とも和多津美神とも書きます。阿曇氏の先祖で、伊邪那岐命が禊した時に生まれた、底津綿津見神、中津綿津見神、上津綿津見神の三神とは別神です。

2、古代の国々の位置関係

私の研究方法は、古代人が遺した同種・同名の山の配置を調べる方法です。井上赳夫は東征経路に「高田」などの「タカ」型地名が沿っていると発表しています。同じ「タカ」型の山名の高い高取山と飛ぶ鷹取山が全国に、対で配置されていることを見つけました。

図は、それを線で結び記号を付けています。この対は東征隊が進んだ方向を表すベクトルであることが分かりました。奈良より西は神武東征、東は日本武尊のベクトルです。

これは多層の記録になっていました。一層が図のたかとり山のベクトルです。二層は高尾山を配置して、たかとり山を補助しています。三層は○尾山で東征途次のできごとなどを記録していました。



右図は魏志倭人伝に登場する壱岐国と末櫛国にある、高尾山を結び北と南に延長したものです。すると北は対馬を経て狗耶韓国に、南は人吉市の高尾山を経て、高千穂峰につながっていました。

この直線は152度の角度で、夏至の日の出の方角が62度なので、152と62の差の90度は、夏至の日の出を東とした時の南北線になります。

魏志倭人伝は対馬国から一支国への渡海を、「また南に一海を渡る」と記しています。しかし対馬の東端から南に進んでも壱岐には行けません。この152度の方位を南と記したと考えます。

そこで上陸後も、この基準で行程の方角を記録し続けたと考えます。すると、魏使倭人伝が記すクニグニの方角が、すべて整合します。

邇邇芸命は狗奴韓国から高千穂峰に続く、奇跡のこの直線を知って、『此地は韓国に向ひ』の詔を發したのであろう。そして高千穂峰から狗奴韓国方向にある山に韓国岳と名付けたと推測できます。また高千穂峰の東に当たる宮崎側を朝日の直刺す国、薩摩の阿多付近を夕日の日照る国と表現したと考えます。「南至投馬国水行二十日」と記す、投馬国の都は西都原であることが分かります。

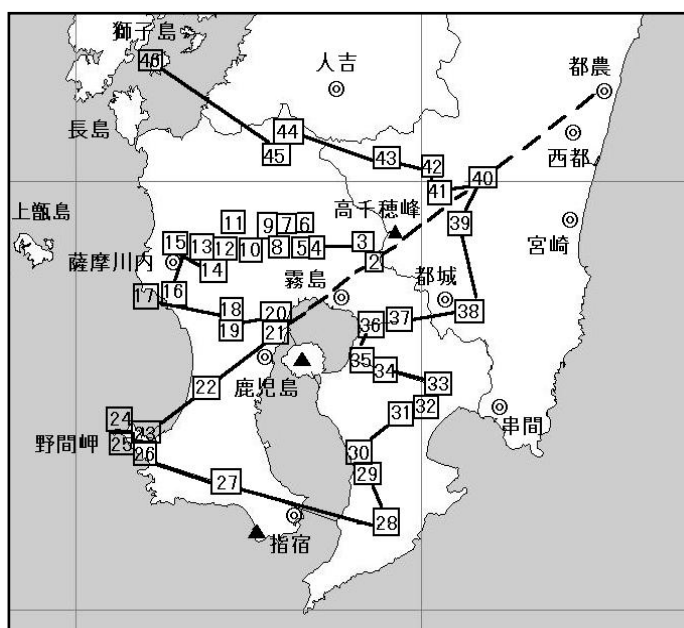


3、天孫降臨から豊玉彦登場まで

右図は南九州に見つかる「丘」と「岡」の名が付く山を結んだものです。高千穂峰から始まり、野間半島に向かっていきます。天孫降臨した邇邇藝命が進んだ道を記録しています。逆「の」の字型に大隅半島に渡り、最後が八代海の獅子島で終わっています。

岡山の丘と、砂丘の丘の組み合わせで七年をかけた旅だったことが分かりました。40の土然ヶ丘からは、猿田彦が天宇受売命に送られて、高天原に戻る行程です。

このとき阿久根市と長島の間には、黒之瀬戸の海峡があるので、どこを渡



ったのか検討しました。下図はその付近の地図です。海峡からやや外れた八代海側の長崎鼻から対岸の明神ノ鼻に渡ったと考えました。

この時、名づけた「長崎鼻」が豊玉彦が拓いた航路の目印になったと考えます。



右上の画像は黒之瀬戸です。手前の大瀬から向こうの明神ノ鼻を目印に渡っています。左に長崎鼻があります。

右の画像は開聞岳の麓にある玉ノ井です。ここで、山幸彦と豊玉姫が出会ったとされています。そして、山幸彦は、豊玉姫の父、海神・豊玉彦の所に三年とどまることとなります。

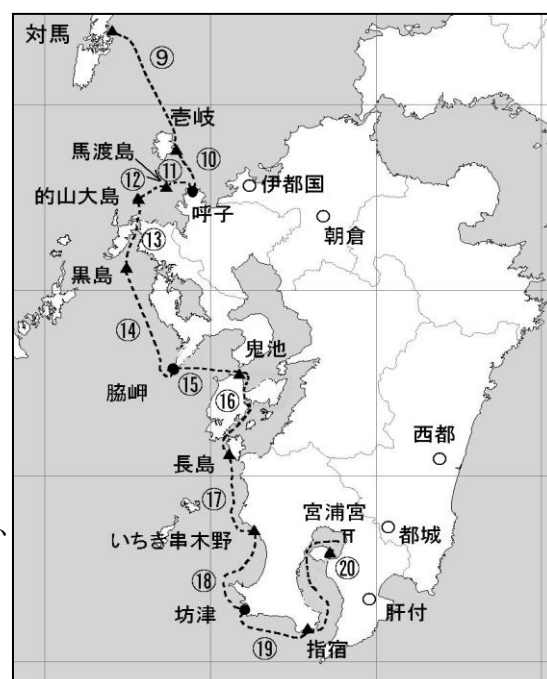


いよいよ、豊玉彦の登場です。塩土老翁が計画した筋書きなのでしょう。右上の画像は指宿の長崎鼻にある龍宮神社です。

4、投馬国へ「水行十日」

魏志倭人伝は「南、投馬国に至る、水行二十日」と記しています。この投馬国への航路が見つかったかも知れません。九州の西岸には長崎鼻の地名が多いので、さらに調べたところ、唐津市呼子から鹿児島湾奥の宮浦宮までの、長崎鼻による水行十日の航路が見つかったのです。

寄港地に入る目印の岬に、長崎鼻と名づけていたようで、近くには見張所の山が見つかります。この航路地図は的山大島（あづちおおしま）から平戸瀬戸を通過し、長崎半島西岸沿いに南下して、天草の本渡瀬戸を経ています。陸地沿いに航路を選んでいるように見えます。航路の終点は鹿児島湾の奥で、佐多岬の外海を通らない、より安全な



航路です。

投馬国の大王たちは開拓のため各地を移動していたので、いきなり都の西都原に向かっても会えるかどうか分かりません。

終点の式内社・宮浦宮は大王の現在地情報を得る場所だったのでしょう。ここは西都原、都城、肝付、霧島など、どちらに向かうにも中心で便利な場所と言えます。薩摩半島に居た場合は、いちき串木野で情報を得ることができます。

| 日程 | 港、浜または島 | 距離 Km | 港の目印 | 見張り山 |
|----|-----------|----------|------|------|
| ⑧ | 対馬市豊玉町鑓川 | | 長崎鼻 | |
| ⑨ | 壱岐原の辻、筒城浜 | 9 2 | | 岳ノ辻 |
| ⑩ | 呼子 | 3 3 | | |
| ⑪ | 馬渡島 | 1 6 | 長崎鼻 | 番所ノ辻 |
| ⑫ | 的山大島 | 2 2 | 長崎鼻 | 番所岳 |
| ⑬ | 黒島 | 5 0 | 長崎鼻 | 番岳 |
| ⑭ | 長崎半島の脇岬 | 8 2 | 長崎半島 | 遠見山 |
| ⑮ | 天草市の鬼池 | 4 9 | 長崎鼻 | 天神山 |
| ⑯ | 長島の西岸 | 5 5 | 長崎鼻 | 物見鼻 |
| ⑰ | 串木野港付近 | 5 7 | 長崎鼻 | 遠見番山 |
| ⑱ | 坊津 | 6 6 | | 番屋山 |
| ⑲ | 指宿の長崎鼻 | 5 2 | 長崎鼻 | 辻の岳 |
| ⑳ | 宮浦宮 | 8 6 | 長崎鼻 | |

投投馬国へ距離 535km 平均漕航距離 54km/日

対馬の長崎鼻は豊玉町にあります。ここは山幸彦の妃・豊玉姫の父で海神あるいは綿津見神（わたつみかみ）ともされる豊玉彦に関係深い町です。和多津美神社があります。指宿の長崎鼻も山幸彦と豊玉比売が出会った開聞岳の麓です。

魏が通った航路は山幸彦時代に豊玉彦が拓いた航路と考えます。このことで海神と呼ばれるようになったのでしょう。出発地点が呼子で、日程が十日だったことから、「南、投馬国に至る、水行二十日」の記述は帯方郡からの日程であったことが分かります。帯方郡から末櫛国までの一万里が水行十日だったことも見えてきます。さらに邪馬台国への行程の記述「水行十日陸行一月」も、呼子から邪馬台国への陸行の日程が一月だったことが分かります。

5、その他の航路

①侏儒国・裸国・黒齒国への航路

「長崎の鼻」などを含めて、長崎鼻は全国に 29 箇所、見つかりました。大村湾内、五島列島周囲にもあることから、大村湾や五島列島への航路も拓いていたことが分かります。さらに瀬戸内海にも長崎鼻があり、結ぶと航路に読み取れます。魏使倭人伝は「女王国の東、海を渡ること千余里でまた国がある。皆倭種。また侏儒の国がその南にある。人の長は三・四尺。女王国を去ること四千余里」と記しています。

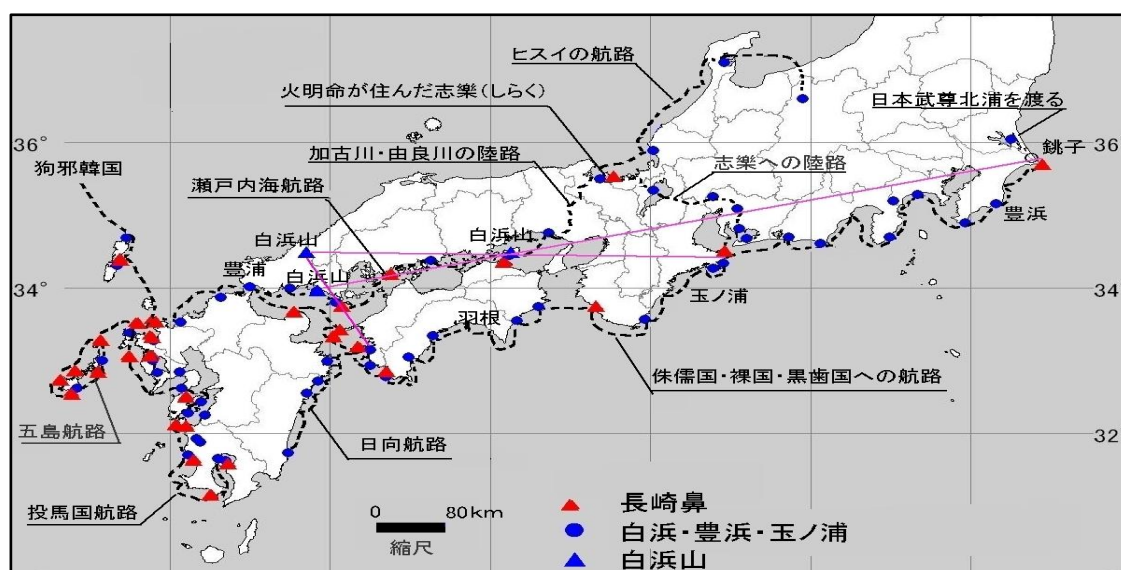
単にうわさを記したのではなく、交易のあった地域のことであることが見えてきました。日本書紀は神武東征も終わる戦いで、葛城に「土蜘蛛がいて、その人態は身丈が短く手足

が長く、侏儒に似ていた」と記していて、東征途次にも侏儒に出会っていたことが分かります。東征の経路から考えて、侏儒は四国のことと思われます。魏志はさらに「また裸国・黒齒国が東南にあり、船行一年で至ることができる」とあります。

長崎鼻は太平洋側に和歌山の白浜、鳥羽、銚子とあり、日本海側は若狭湾の高浜町にあります。これらも航路と考えると、鳥羽から銚子までは400km以上離れていて、1日の漕航距離は50~60km程度とすると、中間に寄港地があったはずと考えました。そこで見つかったのが和歌山の長崎鼻があった「白浜」です。白浜は美しい白砂の浜への形容からついた名称かと思っていましたが、この航路の寄港地に付けられた名の、浜だったのです。

当時の船は岩礁があるかもしれない浦には入らず、浜に船を引き揚げる着岸でした。伊都国があった糸島市二丈深江にも白浜が見つかり、ここの名が源で移動したと考えます。古代の倭国が国造りに向け、躍動的な活動をしていたことが見えてきて驚きます。裸国・黒齒国が見つかるかも知れません。黒齒国とは歯を染める「お歯黒」の風習がある国という意味です。

長崎鼻と白浜、さらに豊玉彦との関係と思われる豊浜・玉ノ浦などを寄港地と考え航路地図を作成しました。



山幸彦時代、豊玉彦が拓いた航路

② 侏儒国・裸国・黒齒国への航路

この航路は伊都国を出発し下関海峡を通り、四国の西岸を南下して太平洋に出ます。四国沖・熊野沖・東海沖・房総沖を経て銚子の長崎鼻に到る最長航路です。途中、28寄港地を比定できて航海日数29日になりました。ただ、もっと寄港地があるかも知れません。先の投馬国への水行十日の表現は、日待ちを含まない航海日数の表現だったことが分かります。この約29日の航海日数は「裸国・黒齒国が東南にあり、船行一年」と記した表現が女

王国から船行「一月」の誤りだったことも見えてきます。

表 侏儒国・裸国・黒齒国への航路

| No | 寄港地 | 所在地 | 距離 km |
|----|--------|----------------|-------|
| 0 | 二丈深江海岸 | 福岡県糸島市二丈深江 付近 | 0 |
| 1 | 芦屋海岸 | 福岡県芦屋町白浜町白浜神社付 | 7 7 |
| 2 | 豊浦 | 山口県長府宮崎町豊功神社付近 | 4 4 |
| 3 | 香々地港 | 大分県豊後高田市香々地羽迫 | 6 1 |
| 4 | 二名津 | 愛媛県伊方町二名津 | 7 1 |
| 5 | 白浜 | 愛媛県宇和島市白浜 | 6 9 |
| 6 | 小筑紫 | 高知県宿毛市小筑紫町 | 8 7 |
| 7 | 中ノ浜 | 高知県土佐清水市中浜 | 5 5 |
| 8 | 白浜 | 高知県黒潮町白浜白皇神社付近 | 5 5 |
| 9 | 白浜 | 高知県須崎市野見白浜 | 4 5 |
| 10 | 手結海岸 | 高知県香南市夜須町 | 5 2 |
| 11 | 西の浜 | 高知県室戸市羽根町 | 3 8 |
| 12 | 白浜 | 高知県東洋町白浜 | 5 8 |
| 13 | 白浜 | 徳島県美波町木岐白浜 | 4 0 |
| 14 | 白良浜 | 和歌山県白浜町 | 7 6 |
| 15 | 玉ノ浦 | 和歌山県那智勝浦町粉白 | 8 2 |
| 16 | 七ヶ浜 | 三重県熊野市木本 | 4 2 |
| 17 | 御座白浜 | 三重県志摩市志摩町御座 | 8 0 |
| 18 | 国府白浜 | 三重県志摩市阿児町国府 | 2 8 |
| 19 | しろんご浜 | 三重県鳥羽市菅島 | 2 4 |
| 20 | 豊浜 | 静岡県磐田市豊浜 | 8 7 |
| 21 | 白羽 | 静岡県御前崎市白羽 | 3 7 |
| 22 | 三保松原 | 静岡県静岡市清水区三保 | 6 6 |
| 23 | 伊豆白浜 | 静岡県下田市白浜 | 7 0 |
| 24 | 伊東 | 静岡県伊東市湯川 | 4 5 |
| 25 | 白浜 | 神奈川県茅ヶ崎市白浜町 | 6 5 |
| 26 | 白浜 | 千葉県南房総市白浜町白浜 | 6 9 |
| 27 | 豊浜 | 千葉県勝浦市部原 | 5 3 |
| 28 | 九十九里浜 | 千葉県一宮町一宮玉前神社付近 | 3 1 |
| 29 | 君ヶ浜 | 千葉県銚子市君ヶ浜 | 6 7 |

* 銚子へ距離 1643km 平均日漕航距離 56km

「草書体で解く邪馬台国の謎」(2013 井上悦文)の説です。魏志倭人伝の国名で対馬を対海国に、壱岐を一大国などと記しているのは、著者・陳寿が草書体で記していたものを、死後に魏の正史として楷書に書き改めた際、草書で良く似た字体の文字を誤って写したという説です。字体の楷書・行書・草書の中では草書が早く生まれて、陳寿(233~297)の時代の楷書は萌芽的な時代だったとのこと。

壱岐の支と大、邪馬台の臺と壱も草書では良く似ていて、誤りの原因として納得できる説です。「年」と「月」も良く似ていて、船行一月が一年と書き写されてしまったとしています。上記調査の寄港地の数がこの説を裏付けた格好となりました。



図 草書の同形文字

航路東端の銚子を黒齒国と想定し訪ねてみました。船が着岸したのは、犬吠埼の北側に続く「君ヶ浜」と思われます。近くの高台の集落、高神には海渡神社があり、豊玉彦こと綿津見大神が祀られていました。

郷土への恩返しのため私設で開いたという「外川ミニ郷土資料館」を訪ねました。長崎鼻の航路のことを、島田泰枝館長にお話しすると、さっそく近所の高齢の方を訪ねて下さり「自分はしなかったが、大正の始めころまで、お歯黒の風習があった。」との証言を得ることができました。



写真 銚子の長崎鼻

館内の郷土写真でも「漁師たちは戦後まで浜の小屋で、ふんどしもせず生活していた。」との説明を受けました。また銚子は砥石を産出するとのことで、航海の交易品の可能性も見つかります。白浜山が三山見つかり、組み合わせで何かを指し示すと考え調べると、鳥羽と銚子を指していました。

③ 日向航路

この航路は黒齒国への航路の途中の宇和島から、佐伯港沖にある大入島片神浦の白浜に続いているように見えます。別府湾に白浜が見当たらないのは、後に神武と戦いになった状況と合致していて、この時も友好関係が無かったのでしょう。

④ 瀬戸内海航路

島続きの瀬戸内海航路は、姫路で終わっていました。大阪湾や出雲には白浜が見当たらないので、これも当時の政治状況を反映しているかも知れません。この時代、まだ出雲の

国譲りは終わっていなかったと思われます。河内付近にも友好的な勢力はいなかったのでしょう。舞鶴付近の長崎鼻や白浜の所在は、大国主命に許されて志樂に住むようになった火明命との関係をすぐに思い浮かべます。

終点、姫路の白浜から近い、加古川と由良川を結ぶ陸路で結ばれていたと思われます。この舞鶴に向かって、もう一つ、三河湾の吉良白浜から内陸に点々と白浜が続いています。銚子での交易品を最短で舞鶴に届けるルートがあったのでしょうか。倭国と火明命の子孫は盛んにやりとりしていたことが推測できます。この陸路が最も近いという地理認識ができていたことや、獣道でなく交易できる本州横断の道がすでにできていたこととなります。

神武東征の際に、火明命の末裔・椎根津彦が速吸之門に突然現れ、水先案内をしています。この航路で椎根津彦は何度も丹波と高天原を往復していたので、高天原が水先案内を依頼したのかも知れません。瀬戸内海の水先案内は大変大事で、明石海峡付近で無く豊予海峡の速吸之門に現れても不思議ではありません。後に倭国造に抜擢されたのも、この功績だったとすれば納得できます。

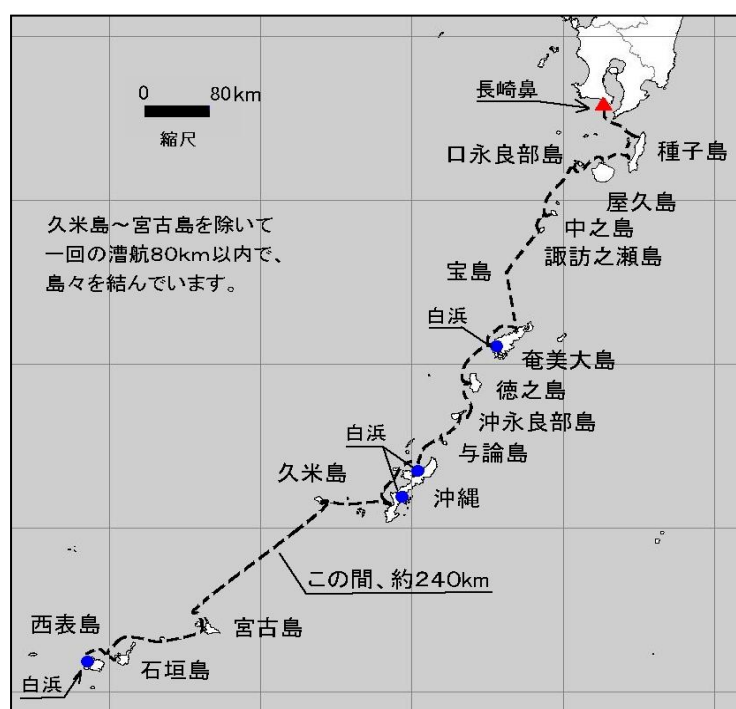
⑤ ヒスイ航路

舞鶴から越前海岸を経て能登半島へ伸び、終点が大町の青木湖畔に見つかった白浜です。糸魚川で産出する勾玉の原石のヒスイを交易する道と考えヒスイルートとしました。しかし、さらに内陸に続くルートであったかも知れません。能登半島は外洋に出ず地溝帯を陸路横断していたように見えます。

⑥ 琉球航路

琉球列島にも点々と白浜が見つかります。最南端は西表島で見つかります。最南端は西表島で現在の日本の南端とほぼ同じです。地図右は1日の漕航距離80kmとして島々を結んでみたものです。久米島と宮古島間だけは240kmもあり、1日では渡れません。どうしたのでしょうか。

漕航で一番怖いのは天候の他に、岩礁があります。ところがこの海原では、岩礁の心配がありません。宮古島入港の際の岩場の危険のみです。朝早く出発し岩礁がなければ、交代で夜も漕ぐことは可能です。方向は星や一定な潮流を見ればかじ



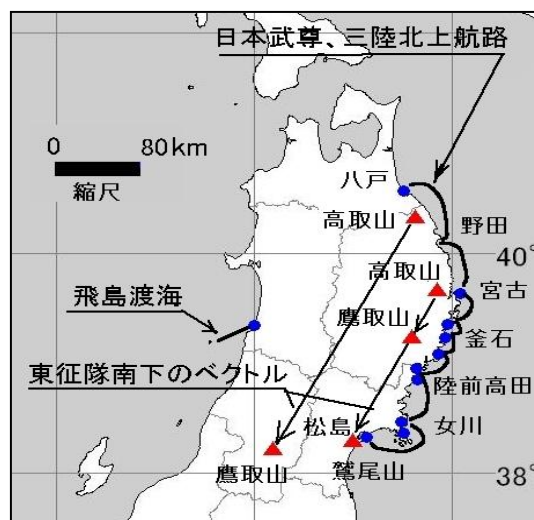
地図 琉球航路

取りできるでしょう。翌日、30kmほどに近付けば島が見えてきて方角を修正し、夕方には着岸できると考えました。

⑦ 日本武尊、三陸北上航路

東北にも白浜があります。三陸海岸には点々とあり、これは豊玉彦の航路でなく、日本武尊が松島付近の七ヶ浜に船で上陸した後、蝦夷の国津神、島津神の案内のもと、三陸海岸を北上した際の名づけと考えます。

北浦を横断した際の名づけが最初です。日本海側に残る白浜は、副将軍・穂積忍山宿禰が飛島に渡った際の名づけでしょう。佐渡、粟島に渡った白浜が無いことに気づきますが、別な形で記録していたことが後で分かりました。



地図 東北の白浜

6、浦島太郎伝説・羽衣伝説

浦島太郎伝説が、前述の豊玉彦が開拓した航路の実在を補強してくれそうです。伝説のあらすじです。

浦島太郎は助けた亀に竜宮城に案内されて、乙姫様の大変な歓待を受けました。しばらく楽しんでいましたが、郷に帰りたくなり亀に乗り戻ることになりました。ところが戻った郷には、知る人も親もいなくなっていて、時代が変わっていたのでした。そして太郎は乙姫様から、いただいた玉手箱を「開けないように」と言われていたにも関わらず、開けてしまいます。すると煙が出てきて太郎は老人の姿になってしまったのです。太郎が龍宮城で過ごした日々が、地上では長い年月となっていたのでした。

竜宮伝説は日本各地に残り、日本書記や御伽草子にも登場します。丹後国風土記逸文には「浦嶋子(うらしまのこ)」の項で、あらすじに近い記述があります。丹後半島には今も色濃く伝説が残り、火明命が住んだ舞鶴東部の志樂や高浜の長崎鼻との関係を想起させてくれます。



写真 指宿長崎鼻

漁師の浦島太郎は、丹後にやって来た豊玉彦の船隊に請われて参加したのでしょうか。浦島太郎の名は、各地の浦や島々を巡った男の意味で、浦島の子と呼ばれ、御伽草子では浦島太郎としたのでしょうか。多くの航路を巡るには何年も要したことでしょう。各地の素晴らしい風景に感動の航海を続け、瞬く間に月日は過ぎました。

豊玉彦の本拠地、指宿の長崎鼻は開闢岳が素晴らしく龍宮のような風景です。今、龍宮神

社があります。琉球の島々も巡り、美しい海や魚たちも見たことでしょう。浦島太郎の活躍に、乙姫様の豊玉姫は帰り際に感謝を込めて「玉手箱」を贈りました。この玉手箱は「玉くしげを入れる手箱」と逸文解説にあります。私は「豊玉姫から手渡された箱」の意味での「玉手箱」と考えました。

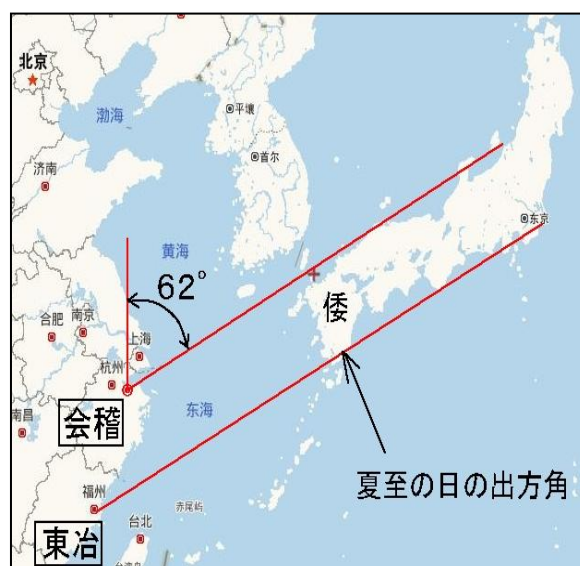
また、別な寄港地・三保の松原には羽衣伝説があります。これも駿河国風土記逸文に記載があります。山幸彦と別れた豊玉姫が、富士の見える風光明媚な三保に、父・豊玉彦に連れられて船でやってきたことの言い伝えと考えます。きっと富士の美しさが高天原でうわさになっていたのでしょう。天照大御神にも伝わっていたかも知れません。

7、会稽東冶

魏志倭人伝の記述に倭人のルーツを示唆している個所があります。倭の海人は体に入れ墨をしていて、水に潜り魚や蛤を採るが、中国東岸の会稽（浙江省紹興市の会稽山付近）の人々の習俗と似ていると記します。また、「其の道里を計ると、まさに会稽東冶の東にあたる」と倭との位置関係も述べています。

ところが「会稽東冶」の記述について「冶を治に」修正した漢書もあって、東冶は東冶（福建省福州付近）とする説と、あくまで会稽山の東とする説があります。そこで、これまでの方角基準、夏至の日の出方角 62° の直線を会稽と東冶から東に伸ばしてみることにしました。右の図です。

二つの直線は、九州島のちょうど北端と南端を通過し、倭種の人々が住んだと記す、中国地方や四国を包含した領域を示しているように見えます。魏使倭人伝の方角基準が倭人伝の中で貫徹していることや、草書体の同形文字による写し誤りが、改めて明かされたように思います。



地図 会稽東冶の東

紀元前 200 年頃、秦の時代、3000 人の人々と海を渡ったと記録される徐福の有力な出発地候補が、会稽の東海岸の寧波市付近とされています。日本のイネの栽培種ジャポニカ米の原産地は、長江の中流～下流域でした。長江の河口にあたるこの付近から出発し、夏至の日の出の方角を目印に、海を渡った徐福の一行こそ、日本に弥生文化をもたらしたのかもしれない。

おわり